

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年二月
あらか		蝸牛	傘張浪人	一葉 かれん 大越 喜夫 のり子 ありぎりす 破れ蓮 絵夢	月を					ひろ志	暦文		ありぎりす		
爆笑の真打ち来る春来る <small>「爆笑の真打」と共に「来る」のが「春」であることに納得感を覚えました。</small>	内ポケに温き焼芋夜景展望	春の虹あの世に届け句ひとつ	頓狂な声の止まざる浮かれ猫 <small>恋猫の様子が上手く表現されている。</small>	色になつたり落とし前にも小指春 <small>小指も色々ですね。</small>	風はまだ梅一輪の硬さかな <small>風の硬さととらえた早春の景が見える。風が硬いとの発想に感服です。今年が遅い梅の開花。季語「梅一輪」が効果的である。硬さが、風の冷たさとおぼみを上手く捉えている。梅の咲はじめの感じが出ている。風の硬さが梅一輪の表現力が素晴らしい。</small>	ファスナーがリアルです。 ファスナーが春のニットで背を向ける	初詣欠かさず杖をたよりにし	駐車灯のちかちか止まず余寒かな	宇治川を風の横切る野焼かな	朧月左の君に腕まくら	冬温し手押し車を待つパジエロ <small>車椅子をパジエロに積んで出掛ける、幸せの親子の姿が見える。</small>	老楽の薄氷の恋飄々と	一缺ごと上り下り松手入れ	鞞は生きてる証拠オホオホ	
松橋春水	高原ひろし	新井のり子	破れ蓮様	網野月を	安田蝸牛	しーしー	幸子	森佳月	檜鼻ことは	宇田靖之	ありぎりす	米山カロ ーリング	幸子	傘張り浪人	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年二月
俳翁 蝸牛		大越 佳月 一駄歩 ひでこ	俳翁 しーしー	米山 くるみ	破れ蓮 総太郎	山菜	凡士				ことは ふみお 月を 順一	政紀 好子 凡士	土璃	好子 あらか	
小恙と侮り難き春の風邪 春の風邪を軽く見なさんやという警鐘の句。「小恙」が上手い。	コロツケの芋の甘さや寒の明け	大人でも小人でもなく卒業す	潮溜りの大淀小淀風光る まさに高校卒業の時そんな感じでした。親の気持ちがよく表れている。卒業式の間は、大人になったと思うし、終われば、友達とふざけあってまだ子供だと嘆いて、この句は、よくとらえています。	飲んで寝て鯉鮓のとどく犬ふぐり 伊豆伊東の景勝地と風光るのクラブが成功している。潮溜りのキラキラが季語と呼応していますね。	枇杷の花内緒話の女学生	やもをより酒の誘ひや春の月 霏困気が出ている。枇杷の花と内緒話の取り合わせが響き合っていて良いです。	野良猫の名をつけバレンタインの日 フランケンシュタインと名づけました！	岩海苔の溢さむばかりわつぱ飯 言葉あそびの句の多いなか、旅情を誘う風景画は嬉しい。	如月のだるまつ夕日や宿毛湾	立春や鳩鳩鳩豆に鳩	さえずりや四人でわけるチョココレート 一人で食べるより美味しいかもしれません。轉りが聞こえるということは、外かに近いところにおいて、広々としたところにいると想像します。そして、チョココレートを分け合う。その四人は、家族なのか、友達なのか想像が膨らみます。四人と言う具体的な数字に景が明確になりました。	八十の坂ゆるり参ろう梅ひらく	落雲雀風に冠羽（かんう）の熱り立つ 中7の表現に様々な意味の深みを感じました。80近い私の応援歌になりました。八十路はゆつくりがよろしい。私はせかせか初詣でインフルエンザ。	かくれんぼ黒堀の陰白い息 黒と白の対比の美しさと、寒い中で楽しむかくれんぼの温かみを感じました。	
松田素風	草介	岩本展平	しんい	森下山菜	煩桜	秋谷風舎	くるみ	ひろ志	光雲2	横井あらか	雪待月田猫	瞳人	岩清水彩香	一駄歩	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年二月
	暮風	卓夫 たか子			暮風 里 霜 幹 田 猫	土璃 朝香	暮風 良月 マスミ 順一	しーしー	霜里 総太郎	光雲2 たか子		楽	音思 米山 喜夫		
立春やうごめきだせる旅ごころ	青天を衝くクレインや冴え反る	米高しパスタを食す春の宵 開き直った風が面白い。時節柄庶民の感情を上手く詠んでいる。	畑焼や竈に匂う玉子焼き	春光をを透かしをりぬ埴輪の目	塗師継ぐと能登に戻る子春立ちぬ その若者の未来に幸多かれと。被災地に戻り、代々の家業を継ぐと決心されたことを、季語から希望を感じ応援します。季語が、美しい輪島塗を継承する決意と響き合う。	鑿跡の残る木仏やあたたけし 上五と中七の木仏と季語の取合わせが良い。	常連のまた一人増え日向ぼこ 慣れた村でゆつたり暮らしている人たち。いつもの場所に住みか常連が集まり、楽しいお喋りが弾む。頭の恐竜と言えば、福井。例年がない春の大雪で恐竜もさぞかし驚いているだろう。	冴返る朝の厨のガラス皿 ガラス皿の透明感と緊張感が季語にふさわしい。	春の風コンビニ袋と遊びをり あれ、遊んでいるんですね。笑い声が聞こえそうです。	ポンポン開く陽だまりの福寿草 ポンポンというオノマトペが良い。	ブヨブヨの寒天スルツと杵の中	山間の荒ぶる風やぼたん鍋 上五中七が効果的にぼたん鍋を引き立てていると思いました。	短冊の筆の掠れや梅の花 光景が浮かぶ句ですね。梅を見ながら短歌を詠みそれを短冊に書いているのでしようね。筆の掠れの措辞が良いと思う。筆の掠れの原因を知りたくならず、大人の別離かな？	恫喝の悪人トランプ鬼やらひ	
大東暮風	後記朝香	総太郎	渋谷きいち	龍野ひろし	河野凡士	かれん	荒一葉	本田みり	青木鶴城	いさむ	和田イチ子	立野音思	新曆文	俳爺	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年二月
霜里 あらか		卓夫 素風	ひろ志 米山	朝香		佳月 彩香	好子 ひでこ のり子 ふみお 山菜 しーしー 草介 みり 一駄歩		山菜	曆文	みり	大越		梗舟	
剪定の済み新人のごとき木々 姿勢を正して装いを新たに春を待つ姿。「新人のごとき」という比喩にハツとさせられました。	彼の世から「ベサメムーチョ」と春日傘	川端の日差し拾ひて春の道 気持ちのいい句です。「日差し拾ひて」が良い。	道具屋の煙管の艶や春浅し 「煙管」に「小粋」を詰めて粋に吸う。昭和まで見られた風俗ですね。道具屋の措辞が良いと思う。	薄氷の覆っていたる地球かな 時事句として読みました。今の世界状況をとでも上手に表現されています。	祖師堂に絶えぬ御明霜の夜	鬼やらい面を外せば福来たる 面を外した父親の顔が浮かびます。家族での微笑ましい豆撒きが浮かびます。	春を待つ米研ぐ音は三拍子 春の訪れは日常のなかに。二拍子ならもつと早く来るだろうか。米はスーザツザツと三拍子で研ぎますね、三拍子はウキウキ。米を研ぐ音が耳に聞こえてくる句です。春を待つ気持ちは三拍子のリズムですよね。米は今、高くても研ぐ音くらい元気で、春を待ちましょう。三拍子というと、ゆつたりとしたリズムなので、気長にゆつたりと春を待っている作者の気持ちの余裕が見えてよいと思います。	路地裏のわらべ歌消ゆ眠る山	植物のキラキラネーム福寿草 そういわれてみれば！	そば啜る窓に春雪深大寺 深大寺の映像が見える。	クレソンの香るや朝のポナペティ お洒落な朝で気持ち明るくなります。	ござに座し花見と人見相半ば まさにその通り、見ている人達をも見ますよね。	色重く横切る影や冬の鳥	子供らに負けじと拾う福の豆 親も必死ですね。	
ふみお	染谷風子	佐藤幹子	岡本たか子	ひでこ	丸山マシミ	酒井癒香	霜里	絵夢	平野楽	岡崎梗舟	持永喜夫	小林土璃	みづる	大塚好子	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年二月
土璃 絵夢 一駄歩	月を	素風	素風		ありぎりす 風子	みり		癒香 傘張浪人 総太郎				癒香			
ひよこ組の海岸散歩春来る <small>園児らの声が、ぴよぴよと春らしく響きあう。子供たちのはしゃぐ声が聞こえてくる。</small>	寒林にをところ晴れやか朝の口笛 <small>口笛の音が聞こえてくるようです。</small>	端無くも朝の窓辺に聞く初音	盆梅の老幹なれど肌のつや <small>盆梅の様子が目に浮かぶ。「端無くも」という言葉遣いが巧みである。</small>	ディスプレイのめっちゃ見事な王将春	君逝きて噛まれし小指見る二月 <small>昔「小指の思い出」と言う歌がありました。</small>	春泥の乾いた顔を洗う昼 <small>農作業をしていたのでしょうか。時間の経過がよく分かる句です。</small>	初電話何度も時代遡り	まご金髪ばあば銀髪ひなたぼこ <small>令和らしき句でほっこりして何故か笑える。</small>	「まごころ」と言ふ名の老舗蜆汁	春さんぽ君とぶらつく白良浜	寒鯉はまな板の上口は〇	薄氷の二人でお茶や黙の席 <small>まだ浅い初な関係なのか、壊れそうな関係なのか危うさが手にとれる。</small>	横溢の眼間にあり枯はちす	春炬燵拳の様な雲を見る	
松橋春水	高原ひろし	安田蝸牛	破れ蓮様	網野月を	森佳月	しーしー	幸子	ありぎりす	檜鼻ことは	宇田靖之	傘張り浪人	米山カロー リング	幸子	石川順一	

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
		良月 風子 煩桜 ふみお 田猫	くるみ			ひろ志 政紀 蝸牛	田猫	政紀	たか子 朝香 ひでこ	彩香 楽 絵夢	良月 俳爺 マスミ 幹子		一葉 文桜香 暦 煩癒	
梅古木日暮の空を押し上げて	風に舞ふ髪さくら貝のやうな耳	<p>馱頭に吠ゆる恐竜春の雪</p> <p>井馱の恐竜たちは絶滅せずに雪に耐え、希望と再生の春へ。</p>	<p>煮え切らぬ人を誘ひぬ春一番</p> <p>季語の設定がおもしろいです。</p>	この沼の魚に耳あり梅見茶屋	<p>雪代に艶めくグリーンタフ初し</p> <p>煩桜</p>	<p>墓碑銘（エピタフ）をなぞる指先冴返る</p> <p>光雲 2</p>	<p>余寒きびし糠床ほのと熱をおび</p> <p>くるみ</p>	<p>春一番マナーモードの微動信</p> <p>ひろ志</p>	<p>碧空へ駆け上がるよに咲きし梅</p> <p>雪待月田猫</p>	<p>冬川原抜き足差し足鷺の足</p> <p>横井あらか</p>	<p>豆撒や雀に福のおすそ分け</p> <p>一駄歩</p>	<p>春めきぬ蛤つゆ温る酒返事待つ</p> <p>瞳人</p>	<p>春陽や足裏（あうら）艶めく涅槃像</p> <p>岩清水彩香</p>	<p>自転車の鍵かけたままバレンタイン</p> <p>新井のり子</p>

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
		風子	しんい	しんい	草介 幹子		光雲2 ことは マスミ 凡士 喜夫	草介				破れ蓮 くるみ	ことは	
ようやつと雪やみ春の光射す	貝塚はかつては海よ朧月	令和なり囁き声の鬼は外 「昭和は遠くなりけり」ですね。	畑焼のふすぼる煙備蓄米 昨今の米騒動が垣間見える。	春めきて銀のひかりの滑り台 ステンレス素材もあるようで銀のひかりに納得。	酒蔵に奈良漬け買ふや春隣 蔵元の奈良漬はおいしいでしょうね。近くにあれば行って買いたいです。	春時雨北ではどかと積もるもの	頬杖にある春愁の軽さかな 駅頭の恐竜と言えば、福井。例年にならない春の大雪で恐竜もさぞかし驚いているだろう。メランコリーの気分がよく出ている。頬杖と春愁の軽さはフランス映画の気だるさ感(アンニュイ)が漂い大人の気分が素敵です。	春動くレールの末の小さき街	故郷の朽ちし卒塔婆枯尾花	空重く奮い立たせて雪を搔く	成人の日羽ばたけ孫よ赤い紅	心和ぐけふ雨水とぞ知りたれば 「心和ぐ」という措辞が素晴らしい。情感に共感しました	震災のビル横たはる余寒かな 復興を願うばかりです。	張りぼての鬼街角に二月来る
大東暮風	龍野ひろし	総太郎	渋谷きいち	かれん	河野凡士	青木鶴城	荒一葉	本田みり	立野音思	いさむ	和田イチ子	松田素風	新曆文	俳翁

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106
	彩香 かれん 梗舟		一葉 しんい	佳月 のり子 かれん		光雲2		煩桜	音思				楽 順一	
黄梅や上澄み液のような空	剥落の母の鏡台別れ雪 <small>大切にしている剥落のある古びた鏡台にお母様への想いがしのばれ季語に響き、詩的な映像が浮かびます。剥落していてもなかなか捨てられない鏡だろう。長年使っていたのでしょう。季語が良い。</small>	冬晴や散歩の子犬寄り来る	つつがなく朝の一椀小豆粥 <small>平凡な一日の様子が季語で生かされた。丁寧な暮らしぶりが窺える佳句。</small>	心中に小鬼飼う身ぞ豆を打つ <small>ドキリとさせられる一句。誰しも小鬼は飼っているものだと思うが、自分の小鬼にも豆を撒くのである。</small>	旧街道七福神を巡る歩歩	願い込め人形飾る雨水かな	枯山の歩荷の背に缶酎ハイ	雪の朝ペンギンの列通勤路 <small>ダークスーツでよちよち歩きで列になって…ほんとペンギン。</small>	六十代も若手と呼ばれ福寿草 <small>超高齢化社会を描く良句。</small>	和を乱す一羽の鳩よ春一番	バレンタインチョコより餡の気分かな	卒業歌唄ひ終はれば再起動	梅が香に書を繰る指を止めにつり <small>梅のいい香りが私にも届きました。</small>	減塩を忘れ節分干いわし
ふみお	ひでこ	佐藤幹子	岡本たか子	霜里	丸山マシミ	酒井癒香	岡崎梗舟	絵夢	平野楽	みづる	持永喜夫	小林土璃	後記朝香	大塚好子

											124	123	122	121
											音思	梗舟		卓夫 傘張浪人
											花よりも名札を追ふて梅見かな <small>梅の種類の札を読むことに気が行ってしまい、しつかりと花を見ずに終わるといふことがありますね。そのあたりをうまく詠んでいる。</small>	卒業や栞に母のつたなき句 <small>どんな句を詠んでくれたのでしょうか？</small>	春雪の積もる車上を凝視する	厭なことすぐに忘れて桜餅 <small>こうありたいものです。</small>
											大越マー ガレット	大越マー ガレット	石川順一	染谷風子